

H-1：人文・社会系支援

人文・社会科学系研究の特性と強みの アピールについて考える

8月30日（水） 11:00-12:30 会場E（4階）

研究評価・大学評価やその評価指標の問題は、昨今大きな関心を集めています。人文・社会科学系の研究に関しては、計量書誌学を中心とした従来の評価システムでは、研究の強みが表れにくいと言われていますが、その研究特性に合った新たな指標の作成も模索されている状況です。

広く社会の世界観、歴史観を育むべきであり、また地域的特性や言語に根ざしている人社系の研究を、世界的に統一された計量的価値観のみで判断することには疑問が残ります。しかし一方で、人社系の学問の側にも、その必要性が社会的に認知されにくい内在的な問題があるのかもしれない。

今回のセッションでは、研究評価、特に人社系のそれに関して、現状の問題点と、その問題を打ち破るための学術支援活動の在り方を具体的に考えていきたいと思います。

キーワードは「媒介者」。

人社系の特性と強みを把握した上で、どのようにそれをアピールしていけば良いのか？人社系の学術支援には、今、プロデュース的観点が見られているのではないのでしょうか。

当セッションでは、まず、京都大学学術研究支援室の「人文・社会科学系研究支援プログラム」の事例を報告します。その後、日本大学の布野修司先生に、工学と人文学の境界領域である建築学・都市計画学研究者として、また滋賀県立大学の研究・評価担当理事として大学運営を経験された立場から、京都大学学術出版会の鈴木哲也専務理事・編集長には、大学出版の編集者という研究と社会の媒介者・プロデューサーとしての立場から、俯瞰した話題提供をしていただきます。

領域と領域、研究と社会を繋ぐ媒介専門家の役割を、URAはどのように担って行けるのか、皆さんと一緒に考えたいと思います。

オーガナイザー／司会者



稲石 奈津子：京都大学 学術研究支援室 URA

京都大学学術研究支援室URA。セゾン文化財団にて、プログラム・オフィサーとして助成事業に従事した後、2003年より早稲田大学・演劇博物館にて21世紀COE・グローバルCOEプログラムの研究支援業務に従事。2013年より京都大学本部構内（文系）URA室のリサーチ・アドミニストレーターとして文系部局を担当。2016年より現職。研究者に近い位置で研究支援に努めている。

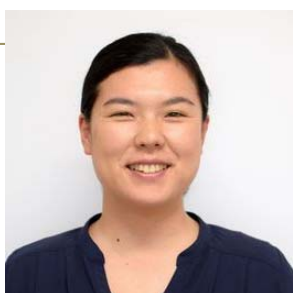
講演者

**布野 修司**：日本大学 生産工学部 特任教授

建築評論家・工学博士、1949年島根県生まれ。東京大学大学院博士課程修了後、東京大学助手、東洋大学助教授、京都大学助教授を経て、2005年より滋賀県立大学環境科学部教授に就任。日本建築学会建築計画委員会委員長、英文論文集委員長。元『建築雑誌』編集委員長。日本建築学会賞論文賞(1991年)、日本都市計画学会論文賞(2006年)。日本建築学会著作賞(2013年、2015年)。

**鈴木 哲也**：京都大学学術出版会 専務理事／編集長

1957年生まれ。京都大学学術出版会専務理事・編集長。京都大学文学部および教育学部に学び、民間編集プロダクションでライター・編集者として活動の後、1996年より京都大学学術出版会編集次長、2006年より現職。著書に『学術書を書く』（高瀬桃子と共著、2015年）、『京都の戦争遺跡をめぐる』（池田一郎と共著、1996年）など。大学出版部協会理事、日本書籍出版協会評議員。

**森下 明子**：京都大学 学術研究支援室 URA

京都大学学術研究支援室URA。1977年和歌山県生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科を修了し博士号（地域研究）を取得後、日本財団アジアフェローシップ（API）フェロー、日本学術振興会特別研究員（PD）、在マレーシア日本国大使館・専門調査員、京都大学東南アジア研究所・特定研究員等を経て、2014年より現職。